

李 啓充 著

市場原理に揺れるアメリカの医療

今中 孝信 (天理よろづ相談所病院)

わが国は国民皆保険によって「誰でも、いつでも、どこでも、平等に」医療を受けられることを誇りとしてきた。しかしながら、検査漬け、薬漬け、3時間待ちの3分診療などと言われるように、医療の質やサービスについて国民の不満が大きい。さらに、国民は現物支給方式によって窓口で医療費を支払わないため医療はタダという意識を作り、医者は出来高払い方式によってコスト意識が働かず、医療費の増大を招いてきたことは事実であり、これからの高齢社会に対応するためにも医療の抜本的な改革が求められている。

このような状況に対して、厚生省はもっぱら医療費対策の面から矢継ぎ早に対策をうとうとしている。すなわち、平均在院日数の“しばり”によって急性期病床と慢性期病床に分け、過剰になった一般病院の病床数を削減する。いろいろな方法によって医師数を減らす。医療費の支払い方式としてDRG/PPS（診断群別定額支払い方式）を慢性疾患だけでなく一部の急性疾患についても導入する、等々である。

筆者の李啓充氏はアメリカに在住しながらこの動きを見て強い危機感を抱いた。改革論議に人間の顔が見えてこないのはおかしい。患者のための医療改革の視点が欠落している。たまたま筆者の母親が首都圏の某大学病院に入院して数々の信頼を裏切る医療行為を体験し、「医療の主人公は患者である」というメッセージを伝えたい。医療の根幹をなす医師